



田邊光則（1967-）ステップス初個展である。Web 検索すると田邊は一陽会のメンバーである。個展と同様、車を主題にスーパーリアリズムの手法で描いた作品を発表している様子だ。オーナーの吉岡に、茨城大学大学院上田薫ゼミ出身であることを聞いた。

一陽会であろうと上田の生徒であろうと関係がないというか、問題はない。田邊が描く世界とスーパーリアリズムの関連性を示すことに何の意味が発生するのであろうか。田邊の作品に、直接目を投じてみよう。

田邊は画廊内に大作 6 点、入口と事務所に小品 3 点、事務所に作品がプリントされた T シャツ 1 点を展示した。大きさ、用途に応じて作品が展開され、映えている。これは自らの作品を客観視している証だ。

私は車に興味がない。歩くのが好きだし、電車内でしか本を読まないの、車を運転することになると読書する時間がなくなる。バイクや飛行機、カメラといったメカにも子



供の頃から全く興味がなかった。それでも、田邊の描く車が「カッコいい」と真面目に感じる。

つまり田邊が描く車とはメカや既製品としての美しさではなく、ひたすらに「絵画的」なのである。ここに、絵画しか持ち得ない創造、手段、素材が溢れているのだ。

また、田邊が作品につけるタイトルも魅力的である。《色即是空》《行雲流水》から仏教徒の関連を導くのは面白くない。むしろ車と仏教の狭間を見る者が自ら埋めることの方が重要なのではないだろうか。

